別紙 2

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：　鄭 秀鎮

論文題目

村上春樹初・中期小説における＜自然の消滅＞

The elimination of Nature in the novels of Haruki Murakami's early and middle periods

鄭 秀鎮氏の博士学位請求論文『村上春樹初・中期小説における＜自然の消滅＞』は、作家デビューを一九七九年にした村上春樹の、一九八〇年代に発表された中長編小説を、人間社会の技術の発達による自然の消滅としてのポストモダンの時代状況を生きる主体の在り方として分析したものである。

第一章は『1973 年のピンボール』（一九八〇年）における作中人物の男性である、「僕」と「鼠」が陥っている時間感覚の混乱について論じている。フランスの社会学者ジャン・ボードリヤールの『象徴交換と死』（一九七五年）における「シミュラークル」という概念を用いながら、「僕」と「鼠」がオリジナルの感覚を失うことで、変化と差異を知覚することが出来なくなり、過去から現在へ、そして現在から未来へと続く、時代が変化するという意識を失う物語としてこの小説を読み解いていく。「僕」が生きていた同時代に遂行されたヴェトナム戦争について語ることが出来ないのも、時間感覚が弱められることで歴史的思考が出来なくなったからだと論証されていく。さらにヴィレム・フルッサーのメディア論を取り入れながら、文章を書く行為が時間感覚を鋭敏にし、歴史的思考を促すことを指摘し、この小説の作中人物である「僕」と「鼠」が物語（小説）を書こうと試みることは時間感覚を取り戻す実践だったことを明らかにした。

第二章では『羊をめぐる冒険』（一九八二年）が論じられている。主人公であり、語り手でもある「僕」が広告の仕事をしていることに、論者はまず注目している。論者は広告を、該当商品をめぐるきわめて微細な「部分」をめぐる情報を、あたかもその「全体」であるかのように拡大強調する言語表現領域であると位置づける。そしてロラン・バルトの、「現代の神話」理論と関連づけながら、作中の登場人物が「ステレオタイプ化した考え方」の枠組に入れられていることを明らかにしていった。論者の独自性は、これまでの『羊をめぐる冒険』についての批判や研究の枠組の中、繰り返し問題にされてきた「背中に星の印のついた羊」について、「抑圧されたものの回帰」として位置づけ直したところにある。

第三章では『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（一九八五年）を取り上げ、「世界の終り」という物語の世界と、「ハードボイルド・ワンダーランド」という二つの世界に分離した作者の意図を理論的に分析することを中心としながら、二つの異なった領域の関係性を明らかにしようとしている。

とりわけ「世界の終り」における「夢読み」の分析をとおして、村上春樹の精神分析への関心の在り方を詳述したところに特色がある。

第四章では『ダンス・ダンス・ダンス』（一九八八年）を対象にしながら、文字文化と映像文化を対立させた構図から、小説世界の分析を行っている。この小説の主人公が、広告のための文章を書くという仕事についていることに焦点をあて、自分が生み出す言葉に対して誇りを持つことの出来ない現代社会の在り方をとらえ、写真や映画といった映像技術によって加工されたイメージの世界との対比において論じている。

論者は、氾濫する技術的イメージと、萎縮していく文字文化という対立の構図の中で、『ダンス・ダンス・ダンス』を位置づけ、この小説が文字で書き記された文字媒体に対する懐疑から、もう一度言語による表現、文字で書かれた文学を信じて生きようとする姿勢へ立て直すところに、その主題を見出している。

終章では以上の四章を総括し、一九八〇年代の村上春樹の小説がシミュラークルで取り囲まれた世界を、無意識の領域から組み変えようとし、挫折させられた物語行為を、いま一度立て直そうとする試みであると結論した。

審査の過程では、繰り返し使用される「ポストモダン状況」の概念規定が不十分であること、はたして日本を、欧米と一体となる「第一世界」という規定に組み込んで良いのか、シミュラークルという概念に頼り過ぎているのではないか、といった批判が出された。

しかし、一九八〇年代の村上春樹の小説の、細部の文化的歴史的ディテールを、しっかりと分析し、世界的なポストモダン状況とのかかわりを明らかにしたこと、予備審査における審査委員からの指摘と批判を真摯に受けとめて、書き直しが誠実に行われたことも評価された。村上春樹の一九八〇年代の小説が、その段階で、同時代社会に対する鋭い批判性を内在させていたことを明らかにしたことも評価された。以上のことから、本審査委員会は、本論文を、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。